

留学先国名 : フランス

留学先学校名 : ボルドー第三大学

留学期間 : 平成26年9月1日 ~ 27年7月28日

今回の留学の最も大きな成果は、将来の展望がはっきりと開けた事である。これまでは大学卒業後に就職するのか、大学院に入学して研究を続けるのか、自分の中ではっきり決められずにいた。美術史を学び続けたい気持ちは強く持っていたものの、大学院に行った際に研究したい主題をみつけられず、迷走していたからである。しかし、今回の交換留学での一年を通してはっきりと大学院に行きたいという意志が固まった。なぜならば、フランスでの美術史の学び方がとても気に入った事、そして私はこれからまだまだこの分野について学ぶ事が沢山あるという事を強く感じた事などがある。更に、大学のある講義にとっても関心を持ち、この講義の主題についてもっと学びたい、研究を続けたい、と思ったからである。講義の主題は19世紀フランス美術批評であり、ただ美術作品の分析、解釈だけでなく、それらをふまえた上で初めて行えるのが批評である。更に、批評といってもこれが正しい批評であちらは間違った批評という事がない分、とても主観的なテーマであり、同じ時代でも様々な意見がある。そして、それらは主観的にも関わらず、各批評家は客観的に批評を行うため、そのジレンマから生じる各批評の違いにとっても魅力を感じた。批評の仕方、批評家によって全く異なり、とても魅力的なテーマである。

その為、この主題の研究を続ける為にも大学院に進み、出来ればもう一度フランスで学びたいと考えている。来年の秋から行く事が出来たら最善であり、今のところ、まず DALF というフランス語力を証明する試験を受けることから始めようと考えている。フランスの教育制度の中には、学生の支援をする奨学金が留学生向けにも様々あることを知り、それらの制度をどんどん活用していきたい。今日、日本と同様フランスの大学もグローバル化に力をいれており、留学生の受入れや留学制度の強化を促進していると聞いた。なので、日本人にとってもいいチャンスなのではないだろうか。この様に来年に向けて具体的に計画を立て始めており、この一年間で得た経験を、最大限にこれから活かしていけるようにしたい。

そして、この留学中には全く予期していなかった発見もあった。私はこの一年間を通して一番よく一緒にいた友達がドイツ人だった。私は、今までドイツに特になんの関心も持った事がなかった。嫌いとか、そういう概念もなかったが、ただ特にこれといって興味を持っていなかったのである。それはその子にとっても同じで、彼女も今まで日本といえばポケモン、という程度で深い関心は持っていなかった。しかし、その子と日々多くの時間を共に過ごすうちに、私はドイツに、彼女は日本にとっても興味をもち文化の交換を沢山した。例えば、お互いの国の料理を作り合い、言語も全くお互い未知の領域である為すこし教えあうなど、とても刺激的であった。彼女との関係で特に興味深かった事は、彼女がいつもとても客観的な視点にたって物事を見る目を持っていた事である。私はそれほど物事を批判的に見る事になれていないので、彼女のその一面で私もより物事を客観的に見て分析する事を意識する様になった。そして何よりも、今まで全く何も知らなかったドイツという国について新たにとっても興味をもち、これは私にとってもとても良い機会となった。きっとこの一年

で彼女に会わなければ、ドイツという国に興味を持つ事はなかったであろうし、フランスという国をよりよく理解する為にも、ヨーロッパの中のもう一つの大国ドイツについて知識を得る事はとても意味のある事だった。様々な国の人と話す事によって、自国を新たな形で再認識することも多々あった。今までは当たり前だとおもっていたことが当たり前でなかったり、またある時は他国と意外な共通点を見つけたり、とても話していて面白かった。なによりも、今まで考えた事のなかったドイツとの共通点が意外に多いことに驚いた。そうして自国のことを今までよりもよりよく理解することが出来た。

その他にも、自己管理能力が高くなった。私は特に、今までずっと実家暮らしであったためこの一年間の留學生活が初めての一人暮らしであった。外国での一人暮らしであったため、今までの生活よりも物事に対してより慎重に対処する様になった。様々な手続きも違う言語で自ら行わなければならないため時には一つのことにとっても時間がかかってしまうことがあった。しかし自分のことは自分でやらなければ誰にも手伝ってもらえない環境で一つ一つこなしていくことで、管理する能力があがった。その他にも食事面や健康面でも、以前より一層気を使う様になり、自分にあった生活リズムが今まで以上に把握出来た。海外で一人暮らししていると、意識せずにだらだらと人とあっていたりして、はじめは生活リズムを狂わせてしまう事もあった。しかしそれにも徐々になにをどれ位したらいいのかがわかる様になった。